

## 多様な主体の協働で身近な自然と生きものを守る —篠山市の生物多様性施策—

篠山市役所 農都環境課

### はじめに

丹波篠山の暮らしは、里地里山の身近な自然や生きものに関わり合いながら営まれてきました。先人たちは、山野草やキノコ、薪炭など衣食住に必要なさまざまなものを身近な自然から得てきました。また、ホタルやメダカ、カエルなど、身近な生きものを農の営みの中で愛でてきました。

近年、丹波篠山の景観や文化は国内外から注目されるようになっていますが、それらは長年にわたる自然や生きものに関わり合う暮らしによって作り出されたものと言えます。

しかし、農村環境の整備やライフスタイルの変化に伴って、里地里山の身近な自然や生きものが失われているのは、丹波篠山においても例外ではありません。ほ場整備や河川改修により、暮らしは安全で便利になりましたが、身近な生きものの生息環境は大きく悪化しています。定期的・周期的に人の手が加わることにより維持・保全されていた里山も放置されています。なにより、それらに伴って、身近な自然や生きものと暮らしの接点が少なくなり、関心も失われつつあります。

篠山市では、身近な自然や生きものを守り、それらと調和した暮らしや営みを次世代に継承するため、2013年に「生物多様性ささやま戦略」を策定し、さまざまな施策を推進しています。

### 主な施策

#### ①生態系に配慮した水路整備

近年、農業生産の合理化や農業者の高齢化を背景に、素掘りの土水路のコンクリート化が進んでいます。市では、暮らしに身近な水辺の生態系の保全を目的として、「農村環境の生態系保全に配慮した水路整備指針」を2016年に策定しました。この指針に基づき、生態系に配慮した工法を提案し、地元農業者組織などの理解を得ながら、生態系に配慮した水路整備を進めています。

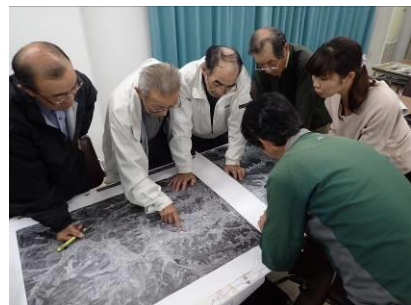
具体的には、アブラボテなど希少な生きものも生息している曾地口地区では、特殊な防腐処理を施した木材（耐用年数15年以上）を格子状に組み合わせた木製水路を整備しました。他の地区についても、石材や木材など自然素材の活用、水路底の自然状態の維持、片面のみの整備など、可能な限り生息環境を保全する工法により、整備を進めています。やむを得ずコンクリート化する場合も、逃げ道や生息空間を確保する工法を採用しています。

また、配慮工法に理解のある市内の土木事業者と協定を結び、地形等さまざまな条件に応じた工事が可能になるようサポートしています。



#### ②ふるさとの川づくり

河川改修により、生きものの生息・生育環境は大きく影響を受けました。また、改修後の護岸は水辺に近づくことができない構造になっている場合も多く、川への親しみも希薄になっていると考えられます。市では、2013年に策定した「ささやまの川・水路づくり指針」に基づき、治水・災害対策も考慮した上で、自然や生きもの、景観に配慮した「ふるさとの川づくり」を進めています。



多紀連山県立自然公園から流れ出る畑川では、篠山東雲高校・鳳鳴高校の自然科学部を講師に迎え、地元の小学生や地域住民らが参加し、魚類の生息状況を調査しました。また、調査の参加者らによるワークショップでは、今後の川づくりの方向性について意見交換をおこないました。また、河川改修前の川の様子について地域住民に「聞き書き」をおこない、かつての畑川の様子や暮らしとの関わりについてマップ化を進めています。今後は、調査の結果、最も魚類の移動を妨げている落差工への魚道の設置に取り組んでいきます。

### ③篠山城跡南堀のハス再生

かつて篠山城跡南堀には一面にハスが広がっており、可憐な花が夏の風物詩として親しまれていましたが、2005年頃こつぜん姿を消してしまいました。消滅の原因について調査したところ、外来生物のミシシippアカミミガメの食害の影響が大きいことが明らかになりました。

そこで、2015年に「農都ささやま外来生物対策協議会」を設立し、産官学民連携で防除調査と防除遺体の肥料化研究に取り組んでいます。これまで、南堀内のミシシippアカミミガメを推計で約9割防除したほか、丹波黒大豆をはじめとする特産農作物への施肥効果について検証してきました。地元小学校と連携し、南堀内への種レンコンの移植にも取り組んでおり、今後もハスの再生を目指した取り組みを進めていきます。



### ④市民による保全活動への助成

生物多様性保全活動をおこなっている市民や団体を支援するための補助制度「篠山市生物多様性促進活動補助金」を設けています。

具体的には、生きもの観察会の開催や外来生物の防除調査などに必要な経費（備品、消耗品、講師謝礼など）を助成しています。また、休耕田ビオトープや江（掘り上げ）の維持管理についても、年間を通じて湛水状態を保つことなどを条件に補助しています。



## 今後の展望

過疎化や高齢化、農業者の減少にともなって、身近な自然や生きものを守る担い手の不足が懸念されています。より多くの人々が、さまざまな関わり方で生物多様性の保全に取り組むことができる仕組みをつくとともに、生物多様性保全に関する理解が深まるよう、普及啓発を進めていきます。

また、先行文献の収集や市内で調査をおこなっている専門家・団体へのヒアリングにより、希少な動植物の分布など生物多様性に関する基礎的な情報の集約、GISを活用したデータベース化などにも取り組み、公共工事の際の配慮や効果的な事業推進に役立てていきます。